

モルディヴの仏教について

——カーシドゥ島——

原 隆 政

現在モルディヴ仏教に関する情報は少ない。イギリス人ベルが一九二〇年に仏跡を発掘して以来、仏教の存在は確認されている。以降何人かの調査が入ったが、遺跡と文献とを照合しての総合的情報は無いと言って良い。現在モルディヴという国のエリアが、国家として成立したのは比較的最近のことと推測できる。すなわち西洋の国家という概念に当てはまってこそ、現代の国家は成立するのであって、年々時々刻々と環礁や島の形状が変化する領土を持つモルディヴでは、植民地時代を含め古来「国」と見なされていたのは限定的なエリアではなかったかと推測に難くない。こうした事情も手伝い、モルディヴ仏教への着手が困難だったと思われる。一般的な見方では、近年までの諸事情に拠る仏跡への無理解が、放置・倒壊につながっている。現在南漸する仏教としてモルディヴが最南端である。しかし更に南下して Diego Garcia 島を含む環礁エリアはイギリス領の軍事基地として活用されていて民間人は入れないが、可能性として仏教遺跡が有る（有った）と考えても良い。本発表は、この南漸した仏跡の存在を確認の意味で開陳することを目的としている。以前より遺跡の大まかな情報は得ていたが、条件が整い二〇〇八年四月「世界宗教探査隊」と称し、合計五人の真言宗僧侶と共に現地カーシドゥ島（北マール環礁以北に位

置）へ向かった。モルディヴは一一五三年以来回教として今日まで至っている。つまり、その年以前までは仏教が根付いていた。モルディヴ仏教の嚆矢は諸説有り未詳であるが、モルディヴの公用語 Dhivehi 語が Sinhala 語から派生したという指摘を鑑みれば、「Dhivehi 語の生成過程」と「モルディヴ・スリランカの文化交流」とが並列的に考慮されて良い。また仏足石があること（モルディヴ国立博物館所蔵）から、仏像の発生期前後の仏教も伝わっていたことも推察できる。ただ、ここにはインド仏教と同時的に教義の流れがあったのか、また「流れ」と言うよりも各種の教義単位が受容されて、十二世紀まで続いたのかは未詳である。この国に仏教を伝えたとするスリランカでは、一一五三年〜一一八六年、Parakrama Bahu I という王が自国スリランカを統治していた。モルディヴでは一一五三年イスラームに改宗された。この両年代の一致は偶然かもしれない。このカーシドゥ島は他の環礁とは独立した位置に有り、モルディヴの中でも五番目の大きさを誇り、底分の経済状況が有ったものと考えられる。現在遺跡は町の外れの森林に放置されている状態である。一応今は五人のスタッフ体制で一人月約三万円の手当てを以て管理していると当局からの報告がある。少なくとも人件費だけで年間約百八十万円の予算が、この遺跡に充てられていることになる。一九九六年に調査したミッケルセンのレポート (the National Centre for Linguistic and Historical Research 2000 MALE) では、放射性炭素式年代測定法で遺跡の状況を報告しているが、個々の遺跡自体の大きさについては大雑把である。因みに人が出入できたであろう程の

第14部会

大ききの堂宇（ほぼ正方形）一つの石製の基礎の大ききは、およそ一辺四・五メートルであり上り口の小さい段が南側（幅七〇センチ）と北側（幅一二〇センチ）に位置している。このデータは先のレポートには無く、南側の段も図から省かれている。菩提樹とおぼしき大木が、境内南側中央に位置し、その北端には浅い井戸の様な水（塩水か）を扱う施設がある。この境内は、草木が伐採されて見られる範囲で長方形・約四百坪くらいはある。一行は、僧侶である為此で（一一五三年以来初めて）法楽を（灯明と線香を以て）捧げた。回教徒の地なので旅行会社はこうした宗教行為は勧めなかった。しかしながら、トラブルが無かった事を付記しておく。

アウグスティヌス時代の

マニ教徒の自己理解について

山田 庄太郎

本発表の目的は、アウグスティヌス研究の立場から、彼の著作『ファウストウス駁論』を基に、四世紀末から五世紀初頭に活躍した属州アフリカのマニ教教師ファウストウスを例として、当時のマニ教徒の自己理解の一端を明らかにすることにある。あった。

既に須永梅尾はその試論的論文に於いて、五世紀以後、属州アフリカでマニ教がキリスト教的異端へと転じ教勢を減じてい

く歴史的事実を指摘し、その歴史的転換点をファウストウスの時代に位置づけている。我々はこの須永の指摘を念頭に、ファウストウスの思想を新たにそのセクト論から捉え、マニ教のキリスト教化の過程に関して一つの示唆を提示することを試みた。議論は以下の三つの部分に分かたれる。

第一に我々は予備的考察として、ファウストウスの三つの律法の概念について考察を加えた。ファウストウスは、真の教えが歴史の初めから継続してきたこと、従って旧約の伝統の内にも義人が見出されうること、またそれ故に旧約は全面的に拒絶される必要はなく彼の言う「真理」に合致するものは受容しうること、の三点を認める。従って彼にとり旧約聖書の否定は、部分的なものに留まる。

第二に我々は彼のセクト論を論じた。彼はセクトを「他の者達と全く異なる見解を抱き、自らと異なりまた全く類似していない儀礼によって神性を敬うことを確立する」ものと規定する。この定義に従い、彼は異教徒とマニ教徒が異なるセクトに属する事を明らかにする。というのも前者が善と悪とに「単一の原理 *monarchia*」を指定するのに対し、後者は神を善の、質料を悪の原理として看做すからである。この「単一の原理」の觀念を、カトリックとユダヤ教は異邦人達からそれぞれ分かれる時に引き継いだとファウストウスは主張する。従って彼によれば、真理のセクトと誤謬のセクトというただ二つのセクトのみが存在するのであり、彼は前者にマニ教を、後者に異邦人の宗教と、そこから生じる諸シスマを位置づけるのである。

第三に我々は、上述二つの議論を基にファウストウスのマニ